

明治初期ハリストス正教会に  
おける仙台藩士族の西日本伝教

山下 須美礼

# 明治初期ハリストス正教会における仙台藩士族の西日本伝教

山下 須美礼

はじめに

東方キリスト教の一種である東方正教は、幕末ロシア領事館の置かれた函館を窓口として日本に流入した。その布教の志を秘めて来日したロシア人宣教師ニコライの元、維新直後に入信した数名の日本人信徒らの伝教により、明治初年以降、主に東北地方で多くの信徒を獲得、多数の教会が設立された。信徒らはその組織を「ハリストス正教会」と呼び、自らを「ハリストアニン」と名乗ったが、最初期のハリストアニンのほとんどが旧仙台藩士であり、彼らの多くがそのまま熱心な伝教者となって活動を行なったことから、最初の受容は彼らの故郷である旧仙台藩領が中心となった。明治一年（一八七八）の旧仙台藩領における信徒の数は一六三二名<sup>1</sup>で、ハリストス正教会の全獲得信徒数の約四割を占めている。明治初年の日本のハリストス正教会は、ニコライという巨大な求心力の元、旧仙台藩士らを中心とする「士族ハリストアニン」の活動によって、旧仙台藩領とその周辺地域を揺籃の地として、伸展しつつあった。

一方で、旧仙台藩領を離れた場所においても、徐々に伝教が試み始められた。それを担ったのも、もちろん旧仙台藩士族を中心とする士族ハリストアニンらである。これらの伝教は、「故郷」という必然性に支えられた旧仙台藩領での伝教とは異なり、重点を置く場所や優先順位などには、組織としての正教会の方針が反映されていたと考える。また、実際の活動を担う立場の伝教者にとっては、縁もゆかりもない場所に飛び込むこととなり、旧仙台藩領のように、以前からの人的ネットワークの中で、生活環境や時代的境遇、教養などを共有する旧士族を対象とした伝教とは異なり、何をどのように伝えるべきか、またハリストアニンとしてどうあるべきかを、改めて問われる場になったことが考えられる。

「揺籃の地」を離れた伝教の方針はどのように形作られ、その手段はどのように獲得されていったのであろうか。それらを明らかにする手がかりとして、ここでは主に、旧仙台藩士族で、のちに司祭となるイオアン小野莊五郎の明治初期の言説と行動を取り上げる。ハリストス正教会では、明治七年以降、伝教先や派遣伝教者について話し合う「公会」が毎年開催されるようになるが、明治十二年（一八七九）の第六回公会においては、伝教方針についての侃々諤々の議論が繰り広げられた。本稿では、それ以前の、伝教方針がまだ確立していない時期を対象として、イオアン小野莊五郎をはじめとする伝教者の言説や行動を可能な限り追ひ、それを検討することで、明治初期のハリストス正教会の伝教が、士族ハリストアニンらのどのような意識に基づいていたのかを明らかにしようと考ええる。

イオアン小野莊五郎を取り上げるのは、維新直後に函館で洗礼を受けた最初期の仙台藩出身信徒の一人であり、その後各地で伝教を行ない、後に司祭となる典型的な「士族ハリストアニン」の一人であることに加えて、当該期の貴重な個人の日記を残していることが大きい。イオアン小野莊五郎にはこの時期の日記が二つある。一つは、明治九年（一八七六）の二月から五月にかけて、東海地方に出向いた際の「海道日記」と名付けられた記録である。もう一つは、年未詳とされた「日記草稿」である。これは、内容の検討から、明治十一年（一八七八）八月から十二月にかけて九州地方に行った際の記録であることが明らかである。イオアン小野莊五郎については、仙台市博物館所蔵の「小野家資料」という文書群があり、その全容は佐藤憲一による解題とともに「伊達家中小野家文書目録」と、『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅶ―仙台藩士資料（家わけ）―』にまとめられている。今回検討する二つの資料も、この文書群に含まれる。また、イオアン小野については、二つの拙稿においても触れている。一つは正教会入信以前の知行地における知的活動について明らかにしたものであり、もう一つは明治一〇年に主筆として発行した雑誌からみえる正教会理解について言及したものである。本稿では、正教会が作成した議事録や報告書等も同時に検討することで、実際の伝教の中で、士族ハリストアニンがどのようなことを考え、それが全体の伝教方針や手段にどのように反映されていくことになるのかを、具体的な行動や言説の中から読み取っていく。

## 一・仙台福音教会の設立とイオアン小野

幕末の函館で、日本における東方正教の拡大を企図していたニコライは、禁教下の明治元年（一八六八）、土佐の浪人沢辺琢磨ら三名に、密

かに洗礼を受けた後、翌明治二年（一八六九）にロシアへ一旦帰国、日本伝道会社を設立し社長に就任した。一方仙台藩領には、幕末の函館においてニコライと接触した仙台藩士らによつて、東方正教についての情報もたらされ、その結果、数名の仙台藩士族がニコライを頼つて函館に渡つてきた。そのうちの一人が小野莊五郎である。明治四年（一八七二）、函館に戻つたニコライは、彼らに教理を教え、洗礼を施した。イオアンという聖名を与えられた小野莊五郎は、同時に洗礼を受けたイアコフ高屋伸、ペトル笹川定吉とともに、さっそく伝教者として仙台へ派遣されたのである。彼らは、東一番町のイオアン小野の自宅を講義所として、伝教を開始した。時を同じくしてニコライは拠点で函館から東京へ移したが、それは本格的な全国伝教を見据えての行動であつた。

イオアン小野は、明治五年（一八七二）より自宅で教理研究生養成の塾を開き、一〇名ほどの書生を養つていた。やがて東京に正教会の伝教学校が開校されるが、入学者の多くは、このイオアン小野の塾で薫陶を受けた者であつたという。多くの士族ハリスティアニンが仙台を拠点に活動する中、明治六年（一八七三）、仙台では教会に集う人々が二〇〇名にも達し、その会は仙台福音教会と名付けられた。しかし、司祭以上の聖職者でなくては洗礼を施すことができないことから、未だ司祭を迎えたことのない仙台においては、教会に集う人々は「入信希望者」の立場に留め置かれた。一方、明治六年に「キリシタン禁制」の高札が撤去されたことを受け、ニコライは伝教活動を一層加速させようとした。ニコライは仙台にいるイアコフ高屋・パウエル佐藤秀六を別な地域での伝教に充てようと、上京を促す書状を書き送つたが、イオアン小野は未だ洗礼を受けられない人々の信仰を保たせることがいかに大変なことを訴え、その指示を退けている<sup>10</sup>。

このころ、東京のパウエル沢辺琢磨と、仙台のイオアン小野らの間に、伝教をめぐる考え方の違いが顕在化してきていた。パウエル沢辺らは「専心布教を任じ、一挙して奥州地方の教化を謀るべしとの思想<sup>11</sup>」を持ち、可能性のあるところに一気に顕在化してきていた。パウエル沢辺らはいたのに対し、イオアン小野らは「先学校を設け有為の伝教師を養ひ、然る後に着々伝道の歩を進むべしとの主義<sup>12</sup>」であり、まずは人材を育てることが優先との考え方を示していた。パウエル沢辺はイオアン小野らについて「みな君子大人にして、長者の風を好み悠々然たるのみ<sup>13</sup>」と表現し、未だ伝教が行き届いていないにも関わらず、泰然としているのは氣に入らないと述べている。この対立は、出会いの当初、パウエル沢辺が旧仙台藩出身者たちに対し、正教への姿勢が学問的関心に傾きすぎていると感じた<sup>14</sup>ことにまでさかのぼり、その相違が蓄積して伝教姿勢の違いとなつて現れたものであると考えられる。

仙台の状況や希望が詳細に伝わる環境にはない中、ニコライは近くにあるパウエル沢辺の意見に基づき、仙台にいる伝教者の配置変更につい

て通達を出した。それは、山形地方、三戸地方、山ノ目・平泉・前沢地方、東山地方、気仙地方など、宮城県とその周辺地域に、仙台から伝教者を派遣するようにとの指令であった。イオアン小野自身、三戸を中心とする南部地域への伝教を命じられ、それに対して次のような上申書をニコライに送っている。

南部の地は函館と仙台との中間にして、頗る枢要の地なれども、福音会尚未だ幼稚にして其体をなさず、今や最も力を其成立に注ぐべきの時なり。且予は保守に適するも、進取に適せざるが故に、敢て新地に赴任するを欲せず<sup>15</sup>

この伝教者の配置計画は、イオアン小野だけでなく、他の仙台の伝教者たちにも「急進の主義<sup>16</sup>」と受け取られ、同意を得られず、実現にはいたらなかった。この上申書は、当時に伝教に対する二つの考え方が存在していたということばかりではなく、イオアン小野が、この時点では新しい土地に赴任して伝教にあたることを欲していない、ということが明示されていることが興味深い。イオアン小野は、ペトル笹川が教理の勉強を中断し、東京での伝教を担うことになったとの報告を受け「此事至要に似て其実甚だ迂なり。方今急にすむ所多く人を得るにあらず、而して人才を養ふにあり<sup>17</sup>」との意見を呈している。伝教は非常に喫緊の課題であるようにみえて、実は非常に遠回りであり、多くの人を得る結果にはつながらない、人材を教育することの方が結局は近道である、と述べているのである。

しかし、南部地域など旧仙台藩領周辺において、正教に関心を持つ人々が日に日に増加しているとの報告が届く中、これ以上伝教をせざるに放置しておくわけにはいかないと判断したニコライは、書面での対立の解決を図った。イオアン小野を代表とする仙台福音教会側の主張を十分に汲み取った上でパウエル沢辺との関係を修復させ、仙台の伝教者の一部を南部地域への伝教に着手させた<sup>18</sup>。

明治七年（一八七四）五月には、伝教方針を確認するために主だった信徒が集められ、会議が開かれた。このうち、毎年行われることになる公会の第一回目である。この時の経緯を『日本正教伝道誌』は次のように記述している。

主の福音を伝ふる伝教師も益々加はり、仙台地方と本会との間に意見の投合せざるものあり、且布教の形勢はいよいよ好況なりしかば、掌院ニコライ師は、当在京のパウエル津田を招き、将来の伝教に就きて諮問する所ありしに、パウエル津田はこれ日本正教会の将来に関するの件なれば、己れ一人の意見を述ぶるに堪へず、願くは地方より重なる伝教師を招集して、集議を開かれたしと具申せり。是に於て掌院ニコライ師は直に一書を仙台に送り又名古屋にも一書を送りて、布教会議のために伝教師を招集せられたり。<sup>19</sup>

「仙台地方と本会との間に意見投合せざる」とは、パウエル沢辺とイオアン小野との間に顕在化した、伝教方針の違いを指すと考えられる。二

コライからの「一書」には「教会を立る事、及び伝教、ハリステアニンの風を為す事を大に熟議せん」と記されていた。その招集状によって東京に呼び寄せられたのは、パウエル沢辺・イオアン小野・イアコフ高屋・パウエル佐藤の四名で、これに東京にいたパウエル津田徳之進が加わった。このうちのパウエル沢辺以外は、維新の混乱期にニコライを頼って函館に向かった旧仙台藩士である。

この第一回公会においては、まず伝教者を配置する地域と派遣者数が討議され、その後それぞれに派遣する伝教者が選出された。その結果、日本人伝教者にロシア人司祭アナトリイを加えた三三名が、「①東京府下」、「②旧登米県地方」<sup>20</sup>、「③宮城県」、「④尾州名古屋地方」、「⑤函館方面」、「⑥岩手県」、「⑦青森県」、「⑧宮城・水沢・山形地方」の八地域に配分されることになったのである<sup>21</sup>。②③⑥⑦⑧は旧仙台藩領とその周辺地域ととらえることができ、①は現在の拠点、⑤は最初の教会が置かれた場所と考えると、その中で「尾州名古屋地方」が、一つの独立した地域として数えられていることに注目する必要がある。この時イオアン小野は、「③宮城県」の長伝教師として、多くの伝教者を束ねる立場を任じられた。この宮城県とは、仙台を中心とする地域を指していると考えられる。

第一回の公会で、正教会全体の方針が合意され、それに則った伝教が行なわれたこともあり、洗礼希望者はさらに増加した。その彼らに洗礼を施すには、司祭がその地を訪れる必要があるが、外国人司祭が国内を巡回して歩くことは現実的ではないことから、日本人司祭の誕生が望まれた。翌年の明治八年（一八七五）五月に行われた第二回公会では、司祭にふさわしい人物として、イオアン小野とパウエル佐藤、パウエル沢辺の三名が選出された。しかし小野と佐藤はその任は重すぎるとして、辞退を申し出る。このことは、会命に背いたととらえられ、二人は伝教の職を免ぜられた<sup>22</sup>。イオアン小野は、長伝教師として統括してきた仙台での役割を失った。

## 二、イオアン小野の東海道伝教

『日本正教伝道誌』によると、第二回公会で伝教職を免ぜられたイオアン小野は、その年の明治八年（一八七五）一〇月に東海道方面へ旅立つたとされる<sup>23</sup>。この時期の正教会において東海道という言葉は、東海道に沿った町々の一部を指し、静岡県掛川から愛知県名古屋あたりを範囲として使用されている。イオアン小野がその東海道滞在中に記した「海道日記」は、明治九年（一八七六）二月二〇日から始まり、五月二十五日に東京の神田駿河台に帰着するまでの記録である。二月二〇日条では、静岡県の掛川にすでに滞在中であることが読み取れ、しかもその日に

名古屋の様子を東京に知らせる書状を書いたことが触れられていることから、それより前から東海地域に滞在し、名古屋などを訪問していたことがわかる。

正教会は、明治一〇年（一八七七）二月より、機関誌である『教会報知』を月に二回刊行するようになる。これは各地の伝教者から郵便で送られてくるそれぞれの教会の現状報告が主な内容で、すべての伝教者と信徒が正教会全体の状況を常に把握できる役割を担うものであった。『海道日記』はその『教会報知』発刊以前の、伝教先での状況を伝えるものとしても貴重である。

イオアン小野の、東海地域における活動の一端がわかる記載が二月二六日条にある。

廿六日、晴、野口孫十郎来、孫十郎者天宮邑豪民而鈴木氏之戚族也、彼曾聞在掛川講聖言、故来叩也、夜略談論、彼大喜終約、他日招余々諾焉。

天宮村（現静岡県周智郡森町）の有力者であり、以前から知り合いである鈴木氏の親戚である野口孫十郎という人物が訪ねてきたという内容である。彼は掛川でのイオアンの講義を耳にし、興味を示して訪ねてきたのである。夜通し語り合い、後日野口がイオアンを招くという約束が交わされた。その約束は、三月四日に果たされ、イオアンは天宮村に向かい、野口宅に一〇日間の長逗留をしている。その間、野口の家を会場に毎日講義を行ない、村人が多いときには七〇名も集まったという<sup>25</sup>。野口はイオアンが掛川に戻った次の日にはまたイオアンのもとを訪れ、四月に村を再訪するという言質をとっている。天宮村の野口氏の場合のように、イオアンが掛川から訪問する先には、森村（現静岡県周智郡森町）の山田氏と坂下村（現静岡県周智郡森町）藤江氏という家があったことが『海道日記』の記述からわかるが、この二つの家の当主はどちらも鈴木氏の婿にあたっている。この鈴木氏は「邑之老人七八名至鈴木氏為講天道湖原<sup>26</sup>」との記述にあるように、村の老人を相手に「天道湖原」の講義を行なっていることから、正教の教えに通じた人物であったことがわかる。イオアンがこの鈴木氏とどこで知り合ったのか、また鈴木氏がいづから正教に触れていたのかは明らかにし得ないが、掛川において鈴木氏はイオアンの力強い協力者であり、彼を介して、新しい聴講者や出張講義先を得ていったことが考えられる。

しかし掛川に滞在中のイオアンが、人を集めて定期的に伝教のための講義を行っていた様子はみられず、わずかに「黄昏村松来、為講馬太伝<sup>27</sup>」や「今夜講教鑑<sup>28</sup>」という記述が散見されるだけである。このことから、ごく少数の人々の要請に応じて、個人的に「馬太伝（マタイ伝）」や「教鑑（教の鑑）」の講義を行なっていたことが考えられる。またイオアンの元には、正教に関する書物を借りたいという人々が入りし

いることが確認できる。四月九日に『東教宗鑑』を借りに来た土師双他郎は、一二日に返却に来た際、そのままその本を購入している<sup>32</sup>。このように、掛川でのイオアンの活動は、非常に個人的なつながりの中で行なわれていたものであったといえよう。

四月の下旬、イオアンは愛知県豊橋と岡崎を訪問している。豊橋にも岡崎にも、イオアンの来訪を待ち望んでいた人々があり、イオアンは連日講義を行うことを要請されている。その間、司祭となり各地を巡回していたパウエル沢辺が、東海道を通行するにあたって岡崎に立ち寄り、そこで入信希望者に洗礼を施すこととなった。その準備のため、イオアンを含め、東海道地域にいる伝教者が岡崎に集合した。五月二日、岡崎で行なわれた機密では、男女合わせて一七名の人々が洗礼を受けた。引き続き、五月一四日にも洗礼機密が行なわれたが、その際には、岡崎在住者だけではなく、豊橋からも希望者が集まり、洗礼を受けている。このように、パウエル沢辺が司祭として各地を巡回するようになったことは、希望者が洗礼を受ける機会が増えたと同時に、伝教者らが、自分の伝教の成果である信徒の誕生を、目の当たりにできる機会を得る結果となった。

東海道滞在中のイオアンには、東京本会から送金がなされていたことが確認できる。三月二八日の日記には、東京から送られてきた為替の換金場所が、普段は掛川郵便局が指定されているのに、今回は浜松郵便局であったために、わざわざ浜松に向いた様子が記載されている<sup>33</sup>。このことから、伝教の職を解かれて東海道方面にやってきたイオアンの活動も、経済的には正教会本会に支えられていたことがわかる。

### 三、第四回の公会まで

明治九年（一八七六）五月に東京の神田駿河台に戻ったイオアン小野について、同年の七月に開催された第三回公会の参加者名簿の中にはその名を見出すことができない<sup>34</sup>。『日本正教伝道誌』の記述によると、この公会ののち、仙台福音教会では、他地域への派遣伝教のため、専任の伝教者がいなくなり、教会の維持に困難を来していた。そのため、仙台の信徒らは相談の上、専任の伝教者としてイオアン小野の就任を要請したという。しかしイオアンは「予は本年公会の際にも、一家の都合によりて伝教の公職を奉ぜざりしを以て、今兄弟等の勧誘あるも、之に応ずる能はず<sup>35</sup>」と述べて、それを固辞した。当年の公会の際には、家庭の都合により、伝教職を辞退せざるを得ない状況であったことがわかる。しかし、信徒らのたつての願いを受け、ニコライからの勧めもあり、イオアンは仙台福音教会の伝教者に復帰した。



この仙台福音教会での伝教者の時代、イオアン小野は、教会の統括にとどまらず、教会の外に向けて、様々な発信を行なっていく。その一つが『講習余誌』の発刊である。『講習余誌』はイオアン小野が編集を担当し、仙台において発刊された雑誌であり、毎号一ページ、月三回の発行を目指していた。第一号の発行が、明治一〇年（一八七七）三月一五日であることから考えて、明治九年の秋以降に仙台福音教会の伝教者に復帰したイオアン小野が、仙台における教会活動のかたわら、この雑誌の発刊準備を進めたことが想像できる。第一号の発行を記念して、明治初年に共に仙台から函館に向かった真山温治が叙を、立花（但木）良治が祝辞を寄せているが、その内容からこの雑誌の目的とするところが明らかとなる。以下は立花の祝辞である。

講習余誌ノ発兌ヲ祝ス（仙台新聞編輯長 立花良治）

讚美ス、講習余誌ノ発兌賛美ス、該誌論旨ノ精微人ヲシテ靈魂ノ汚穢ヲ洗ハシメ、人ヲシテ肉体ノ健康ヲ保タシム、此誌ヲシテ社会ニ洽カラシメ、此旨ヲシテ人心ニ微セシメバ、国以テ文明ニ赴キ、人以テ開化ニ進ミ、実ニ 主ノ意ニ適ハントス、蓋シ其結果ヲ觀ル、遠キニ非サルヲ信ス、敢テ祝ス<sup>33</sup>

学び、考えるところを広く社会に問うことにより、文明開化を推し進めることは、主の意に沿うことである、と述べられている。執筆者は編集のイオアン小野を初め、パウエル佐藤やパウエル笹川など、そのほとんどが旧仙台藩出身の士族ハリスティアニンである。その記事は「自由ノ話」<sup>34</sup>や「人性ノ権」<sup>35</sup>というような、概念の解説を目的としたものや、「人間生活ノ目的」<sup>36</sup>「日曜日ノ身持」<sup>37</sup>など、どのように暮らすべきか、という示唆を与えようとするもの、そして「嬰兒ヲ訓育スル園ノ話」<sup>38</sup>「公園問答」<sup>39</sup>というような、より具体的に西洋の社会を紹介するものなど、多岐にわたっているが、共通するのは、すべて啓蒙的な視点で記されている点である。正教の教義そのものや、正教への勧誘が全面に押し出された記事は非常に少ない。この雑誌の発刊事業は、正教会の伝教が各地に勢いよく伸展するなかで、まずは人材の育成に力点を置くべきというイオアンの主張が重視される雰囲気形成されにくい状況を受け、その代わりに、その主張を少しでも実現できる方法として、イオアンが押し進めたものではなかったかと考える。この『講習余誌』と時を同じくして、イオアンは、仙台において演説会も主催している。

このように、明治九年から一〇年（一八七七）にかけてのイオアン小野は、教会の業務にとどまらず、仙台における啓蒙的な諸活動においても中心的な役割を担った。しかし、明治一〇年の第四回公会にも姿を見せていない。公会に「仙台福音教会之景況」<sup>40</sup>としてパウエル佐藤が書簡で寄せた報告には、「イオアン小野ニハ病人アルヲ以テカヲ他ニ及ホスヲ得ス」、「是レマテ祈祷ヲ務ムル者ハ長伝教者イオアン小野ナルガ、之

レヲモ止メテ一人ノカヲ他ニ分タン」との言葉がみえ、イオアン小野は家族内に病人を抱えているので、教会活動の負担を他の人に回したいとの提案がなされている。公会の後、同年八月六日付けのニコライからイオアン小野への書簡では、「聞ク兄ノ愛母病大ニ篤シト、誠ニ惜ムヘキナリ、願クハ主ノ恩ニヨリ康安ヲ得ルコトヲ<sup>41</sup>」とあり、イオアン小野の母親が重篤であったことがわかる。その母親は明治一〇年九月一六日に亡くなった<sup>42</sup>。正教を奉じ、マリアという聖名を持っていたという。『講習余誌』の発行も、明治一〇年八月一五日発行の第一四号までは、月三回のペースがだいたい保たれていたが、それ以降、第一五号が一月五日に発行されるまでには、三か月間の空白期間がある。このことから、この時期のイオアンは、教会活動においても言論活動においても、母親の看病や死去をめぐる繁忙の中で、思うような活動ができない状況にあったことが推測できる。

翌年、明治一一年（一八七八）の五月には、増加する洗礼希望者に対応するため、さらに日本人司祭を増員することが図られ、仙台福音教会より一名選出するよう、ニコライより指示があった。仙台福音教会の信徒らはイオアン小野を司祭候補者として選出したが、イオアン小野は「私事を以て、この公選を辞し、今直に司祭の職に就任する能はず<sup>43</sup>」と述べ、再び司祭となることを辞退した。「私事」とは、母親の死を受けた、家族内の諸事情を指すのであろうか。イオアン小野の代わりには、パウエル佐藤が選出された。七月一九日、パウエル佐藤は他の司祭候補者であるイオアン酒井篤礼・マトフェイ影田孫一郎・ティモフェイ針生大八郎・イアコフ高屋とともにウラジオストクに向き、司祭の叙聖を受けた。これにより、明治八年（一八七五）に司祭となったパウエル沢辺を含め、日本人司祭は六名になったのである。仙台福音教会の信徒らは「イオアン小野が就任するを得るの期に至るまで<sup>44</sup>」イオアン小野の司祭就任を待つとし、その後イオアン小野は、明治一四年（一八八一）の公会で選出され、司祭に叙聖されている。

六月に行われた明治一一年の公会においては、司祭及び司祭候補者を中心に、人員の配置が話し合われた。その結果、パウエル沢辺が函館を拠点に北海道全域、イオアン酒井が盛岡を中心に八戸・三戸・福岡（二戸）・三本木・秋田地方、マトフェイ影田とティモフェイ針生が二人で宮城県佐沼周辺と仙台・石巻・湊・高城周辺、イアコフ高屋が大阪を中心に和歌山・岡山・鹿児島、パウエル佐藤が東京およびその近隣と決定した。この公会で正式に認められた伝教者は七三名で、そのうち二七名が正伝教者、残りが副伝教者である。明治九年にイオアン小野が伝教のためを訪れていた地域は、表の22から24に相当するが、岡崎には七六名、名古屋には四名、豊橋には五二名、袋井・森・天宮は合わせて二九名の信徒がおり、それぞれ伝教者を配置されたことがわかるが、掛川については、独立した項目がないことから、本会に報告されるような成果と

表 明治11年(1878)7月の伝教先と信徒数

	伝教区	教 区	信徒数
1	降待会 (東京)	麴町・四谷・両国・浅草・神田・下谷・牛込・駒込・ 本郷・深川・左記以外・本会	785
2	顕栄会 (岩手および宮城地方)	佐沼・登米・高清水・涌谷・寺崎・太田村・伊豆野・ 若柳・十文字・石越・金沢・金成・宮野・沢辺・ 築館・岩ヶ崎・山の目・一関・東山教区の7村	1209
3	福音会 (宮城地方)	仙台とその周辺・古川	423
4	復活会 (蝦夷島)	函館とその周辺・福山	260
5	十字会 (岩手地方)	盛岡・釜石とその周辺・大土とその周辺・土沢と その周辺	230
6	青森地方	三戸・福岡・三本木	101
7	同じく青森地方	八戸	32
8	秋田地方	毛馬内・十二所・大館・久保田	92
9	三者会 (栃木地方)	佐野・上野・大久保・小見・栃本・トナガ	73
10	宮城地方	石巻・湊とその周辺	110
11	同じく宮城地方	タカシ・福田・上下堤	88
12	福島地方	福島とその周辺	38
13	同じく福島地方	白河	8
14	栃木地方	西沢とその周辺	
15	同じく栃木地方	喜連川・佐久山	21
16	群馬地方	前橋とその周辺	50
17	同じく群馬地方	高崎・足利	19
18	下総地方	佐倉・松崎・船尾その他・大森・木下・カナイチ・ 銚子・塚崎	63
19	神奈川地方	小田原とその周辺	137
20	同じく神奈川地方	八王子	5
21	伊豆地方	三島・修善寺・立野・韮山・江間その他	45
22	愛知地方	岡崎とその周辺	76
23	同じく愛知地方	名古屋	4
24	同じく愛知地方	豊橋	52
25	静岡地方	袋井・森・天宮	29
26	和歌山地方	和歌山	20
27	大坂	—	41
28	備前地方	岡山	
29	四国、阿波地方	徳島	本年より 伝教開始
30	九州、鹿児島地方	鹿児島	
31	横浜	—	
		計	4115

※ニコライ著、中村健之介訳『明治の日本ハリストス正教会—ニコライの報告書—』(教文館 一九九三) 13~22頁、により作成。

はなっていないかったと考えられる。この会では、伝教者の配置の議題に際し、これから伝教をはじめ新しい土地も含めて考えるのか、という問題が浮上したが、それは採決の結果、四分の三の賛成で含めるということになったという。最初に議論されたのは、「早急に伝道者を派遣すべき鹿児島<sup>46</sup>」であった。誰を伝教者として派遣するかという問いに対し、四人の伝教者の名が挙がったが、その中から過半数の賛成でイオアン小野が選ばれ、鹿児島<sup>46</sup>の伝教者に決定した。司祭への推薦は断ったイオアンであるが、当年度から伝教が開始される鹿児島<sup>46</sup>の伝教者として派遣されることには、了承を示した。

#### 四、明治一一年の鹿児島伝教

第五回公会の決定を受け、イオアン小野が鹿児島へ向けて旅立ったのは明治一一年（一八七八）八月二三日のことである。同じく公会で岡山に派遣されることになったスピリトン大島と同行ではなかったが、道すがらたびたび一緒になることもあった。イオアンの行程は、「芝停車場<sup>46</sup>」から汽車に乗って神奈川まで行き、そこからは徒歩や駕籠で東海道を西に進み、神戸から船に乗るという計画であった。イオアンは東海道沿いの町々で三年前の滞在の際に知り合った人々を訪ね、またそこに派遣された伝教者と話し、時には講義や説教を行ない、ゆっくりと西へ進んだようである。まず静岡県<sup>46</sup>の掛川周辺では、鈴木氏や天宮の野口氏らとの再会を果たし、講義などを行なって三日間滞在した。その後、愛知県豊橋では、やはり知人の見舞いをし、会堂での祈祷にも加わっている。岡崎ではそこを管轄するステファン大越とともに演説を行なうなどして、四日間滞在した。次に向かった名古屋では、そこに派遣されているパウエル津田の家に泊まり、ともに方々を訪ねている。大阪に到着したのが九月九日のことであり、ここでは大阪に滞在している司祭のもと、数人の伝教者が集まり、時には大阪観光にも出かけた。イオアンは鹿児島<sup>46</sup>の前に長崎に立ち寄る予定であり、長崎行き<sup>46</sup>の船を待つ一〇日間ほどを大阪で過ごしている。船で到着した長崎においては、数人と面会し、正教の教理についての議論を行なったほか、浦上を訪ねたり、陸軍埋葬地に墓参していることが興味深い。墓参についての記述は「至陸軍埋葬地、而尋伊佐敷氏之墓、墓建一木柱題曰二等中警部伊佐敷輩之墓、傍記明治十年八月十五日没<sup>47</sup>」とあり、知り合いであった伊佐敷警部の墓で祈りを捧げたことがわかる。このように、長崎訪問は、イオアン小野が、鹿児島へ行く機会に是非とも立ち寄りた<sup>47</sup>と考え、ルートに組み入れたと考えられる。

長崎から再び船に乗ったのは一〇月六日のことで、鹿児島には一〇日に到着した。イオアンが来訪する以前の鹿児島と正教の関わりを詳らかにし得ないが、「我輩ハ十月十日ヲ以テ本地ニ着セトモ、満城焼痕ノミニテ居所ヲ得ス、暫ク内ノ丸ト云僻地ニ閑居セシガ、巡查石田ロマン氏ノ周旋ニヨリテ、日頃下野上橋通ト云フ中央ノ地ニ居ヲ占メタリ<sup>48</sup>」という本会宛ての報告書が提出されており、その中には「巡查石田ロマン氏」という、すでに聖名を持った人物が現れていること、また、明治十一年一月に鹿児島島の東千石馬場に「伊々斯々正教会」が創立されたとする研究<sup>49</sup>があることから、少なくとも、すでに正教に触れている人物が鹿児島に存在したことは確実である。イオアンは到着早々、酒匂氏、三原氏、川畑氏、石田氏といった、おそらくイオアン来訪の連絡を事前に受けていた人々と、頻繁な行き来をしていることが日記から読み取れる。一四日には、居を川畑氏宅に移し、翌日川畑氏に対し正教教理の説教を行なった。まだ住居の定まらない一四日の日記には「至西郷及諸士之墓地<sup>50</sup>」、翌々日一六日の日記には「又至警視戦死埋葬地、訪中川操吉之墓<sup>51</sup>」との記述がある。中川操吉は仙台の人で、明治四年（一八七二）、イオアン小野やペトル笹川が自宅で開いていた教理研究の塾で学びその後上京、明治五年（一八七二）駿河台にて洗礼を受けた人物である。長崎で訪れた「伊佐敷氏之墓」の伊佐敷<sup>52</sup>警部については、『日本正教伝道誌』に、明治五年のこととして、下記の記述がある。

時の政府は、尚これを疑ひ、警視庁に命じ、在職の警部伊坐敷鞏（即ちイアコフ伊坐敷、鹿児島人）・大山綱正（鹿児島人）等をして、ハリストス教研究の書生の如く装はしめ、ニコライ師の学校に入学し密々探偵せしめたり。伊坐敷等校内に起臥し、深く探偵を遂げたるも、純然たる宣教師なるニコライ師の事に関しては、素より一点の疑を入るべき点もなく、又学校に於て学ばしむる所の教理、また伝教師をして伝へしむる宗義の如きも、公明正大なる宗教にて、又世間に流言するが如き事の痕跡もなく、却てこの正教こそ、これ実に今後我日本帝國の宗教となすべきものなる事を認めたり。探偵の為に、偽りて学校に入りたる伊坐敷は、却てハリストス正教を信じ、聖名をイアコフと称し、斯教の為になすあらんとするの人なりしに、不幸にして病のために逝けり。<sup>53</sup>

伊坐敷鞏は元々は内偵のために教会に送り込まれた人物であったが、その後自らも正教の洗礼を受けるにいたった。長崎の墓に葬られていたのは、おそらくこの人物であろう。伊坐敷も中川も、政府側の一人として西南戦争に出勤し、任務の中で命を落として、その場所で葬られたと考えられる。イオアン小野が、親しい付き合いのあったであろう二人の墓参をするのは当然といえるが、そのなかで、中川よりも先に西郷らの墓を訪ねていることは、今後検討すべき課題が残る。

一六日からは、イオアンはいくつかの工場を見学して回っている。一六日には磯浜紡績場、一九日には田浦製陶場と竹会社、二二日には花会

社を訪問した。特に一六日の磯浜紡績場については「午後携川畑氏之女至磯浜紡績場、妙巧堪驚、余歎様窮其審而記之徘徊數時、竟期他日而帰<sup>54</sup>」  
とあり、その工場の技術や設備の巧妙なさまに驚き、詳しく書きとめようと数時間にわたって滞在したことが記述されている。

イオアン小野は、鹿児島について三週間ほど見聞したことを、一月三日に東京本会に書状で報告している<sup>55</sup>。続けて一月一日に送付した書状と合わせて、『教会報知』第二二号に「鹿児島県下之景況」として掲載されたが、ここでは下記のような、非常に否定的な感想が遠慮のない表現で書き連ねられている。

当地不学本邦第一ナルベシ、男子ノ字ヲ知ル者百人中一人、女子ハ千人ノ中一人ナルヨシ（字ヲ知ルトハ仮名ノコト）。士族頑固暴威ヲ失ハズ、平民卑屈名状スベカラズ。風俗野蠻ニシテ遊蕩淫戯多シ、毎日事ナケレバ必ズ酒ヲ吞ミ三弦ヲ鳴ラシ、男女放歌シ醜々聞クニ堪ヘズ、女子ニシテ泥酔シ、白日街頭ヲ放歌躍舞シクル者、我輩ハ生来始テ此地ニ見タリ。風俗ノ不宜コト、又方言ノ不適ナルコトヲ説ケバ一応ハ御尤千万、此地ハ何分僻地ニテ実ニ御説ノ通りナリト云フ、大ニ感服セシカ如シ、然レトモ若シ再三ニ及ベハ必ズ怒テ東京ノ言語モ宜シカラズ、大坂ノ風俗モ宜シカラズト云テ威張ルナリ、是ハ国質ナルベシ。男子暴飲五升ヲ傾ケ、女子二升ヲ傾クト云フ、此ノ如キ者、毎町二三二人下ラズト。当地ノ人民ハ唯靈魂ノ楽ミヲ知ラザルノミナラズ、肉体ノ楽ミモ少シク風致ヲ帯ヒタル上等ノ楽ミハ知ル者断テナシ。<sup>56</sup>  
これはかつて自分自身も実際に出兵し<sup>57</sup>、「賊軍・敗軍<sup>58</sup>」の烙印を押されたその相手である鹿児島を目の当たりにした、一種の高揚感が言わせたものであろう。

一〇月三〇日には知覧の伊佐敷氏を訪ね、その後一月三日には請われて祈祷、八日には酒宴を開いている。『教会報知』には「伊佐敷の祖父は老人に候得共、至て正直にて学問も有之、少々頼敷人に御座候、尤も書籍等見せ置申候、且つ大に周旋の心得に相成居申候、不日両三名の書生を遣わすと約束も致せり。」<sup>59</sup>とあり、この伊佐敷氏は、東京本会に内偵として入り込み、その後長崎で亡くなった「伊佐敷警部」の祖父であると考えられ、「少々頼敷人（たのもしきひと）」との評価を加えている。イオアン小野の鹿児島での伝教活動は、このようになってをたどって始まったことがわかる。

一二月二日には下記の報告がなされている。

廿八日軒前ニ「耶蘇正教講義」ノ六大字ヲ掲シ、又同様相認メ、傍ニ旧作事跡及ヒ番地ト姓名ヲ記シ、同処ニテ毎夜七時ヨリト細書シテ、凡ソ往来繁多ノ街衢二十余処ニ掲示シ、昏後ハ軒前ニ燈ヲ点シ、又「耶蘇正教講義」ト大書シ、七時ヨリ開講致候処、三十名許来聴者有之

候事、是ノ当所着已来始テノ講義ナリ、同廿九日来聴者八九十名、同三十日来聴者百二十名余ナリト、十二月一日、其来聴スル者幾名ト云フヲ不知、席已ニ滿テ戸外ニ立ル者亦多シ、始テ入来ル時ハ冷笑ノ顔ヲ以テ嘲ケリ半分ニ来ル様ニ相見得申候、講義已ニ半ニモ至レハ皆低首シテ敢テ動ク者ナシ、講義終レハ甚懣懣ニ暇ヲ告ケ去ル、最初入来ル時トハ景況甚異リ申候、<sup>60</sup>

これによると、街中で宣伝を大々的に行ない「耶蘇正教講義」を開始したところ、一月二十八日には三〇名ばかり、二十九日には八、九〇名、三〇日には一二〇名余り、一二月一日には戸外に立つ人まで出るほどの盛況をみせたとのことである。来聴者の表情から手応えを感じていることが報告されている。次の書状では、「過日陳述セシ後追々聴衆モ相増シ、毎夜二百名已上ニ御坐候、雨降等ニテモ極不足ノ時モ百五十名ヨリ減シ不申、少數多人数ト見得候節ハ、三百人已上ニ有之申候<sup>61</sup>」と述べられ、非常に多くの人々が、引き続き講義を聴きに來ていることが報じられた。しかし、「日記草稿」には二十九日の来聴者は六〇名<sup>62</sup>、三〇日も「講来聴如昨<sup>63</sup>」とあり、東京本会に報告された数字とは異なる。このことは、鹿児島が今後さらに伝教が発展しうる土地であるということ、東京本会、または全国の伝教者らに認識してもらいたいという、イオアンの気持ちの表れととらえられよう。しかしながら次の書状では、「寥寥タル有様ニテ、多クシテ拾四五名、少ニシテハ三四名位ノ聴人有之<sup>64</sup>」とあり、一時の盛況ぶりが収まり、聴衆が一〇名前後に減ったことが報告されている。この要因を、イオアン小野は次のように説明している。

如此寥寥ヲ極メ候様相成候原因ハ私ノ不勉強第一ニ候得共、其他ニモ所以御坐候、彼ノ「プロテスタント」人ノ両派出張候内、一人ハ世故ヲ雑テ講シ、尤モ言語滑稽ニ渡リ俗人ノ耳目ヲ娛ハシメ、羊皮ヲ蒙リテ岐路ニ引キ候ニ付、自然彼ニ向フ様ニ相成申候、又今一ツハ甚ダ修飾ヲ極メ、且ツ「ラルガン」ヲ持参リ、毎夜奏樂致候ニ付、是又兒女ノ欲ヲ取り申候、其上当時ハ米国人参リ居、甚ダ大入りノ様子ニ御坐候、是ガ為ニ訥弁ノ真理ヲ聴クヨリモ娛ミ半分ニ集リ申候次第御坐候。<sup>65</sup>

これ以前の書状において、四名のプロテスタントの伝教者が長崎から鹿児島に來ており、「未ダ正教ノ『プロテスタント』教ニ卓越シタル宗徒ノ正統ナルコトハ知ル者無之候」との報告がなされていた<sup>66</sup>。彼らは世間話を織り交ぜ、滑稽で楽しい話をし、しかもオルガンを演奏して楽しませるばかりでなく、米国人宣教師を見る目的でも多くの人が集まっているという。それに対してイオアンは、「訥弁」一つで対抗しなくてはならない状況にあった。イオアンは、学校教師や士族には少々望みがある者もいるが、平民には子どもに教えるようなつもりであたらなければならぬといふ述べている<sup>67</sup>。しかしそのような中から、少しずつ質問する者が出てくるなど、わずかな手応えを感じつつあったといえよう。

## 五、おわりに

明治一二年（一八七九）七月、第六回公会が開催された。そこにイオアン小野が提出した鹿兒島の状況は、未だ信徒として教えられる人はいないものの、正教を信じて講義に参加する者が一名いる、というものであった<sup>68</sup>。この公会においては、西南地方の伝教に力を入れるべきかどうかが争点の一つとなったが、その際に鹿兒島の状況についての説明を求められたイオアンは、「世人ハ外貌ヲ見テ驕傲親シム可ラサルモトスレトモ、其心ハ甚タ謙遜ノ心ニテ真実ヲ尋スルナリ、先ツ第一ニ彼ノ県人ハ集合心アリテ、彼ノ一昨年西南ノ役ニハ死ヲ惜マスシテ皆ナ協同セリ、此ノ如ク一致集合スルノ心アル故ニ惡ニ趣ケハ恐ル可シト雖トモ、善ニ集合スレハ甚タ宜キナリ<sup>69</sup>」と述べ、伝教活動を通して実際に多くの人々と関わる中で、到着当初の悪印象が一転していることがわかる。

ロシア人宣教師ニコライは、早い段階から東京以西への伝教に熱い思いを抱いてきた。前年のロシア本国への報告書の中でも、「実のところこれまで宣教団はもっぱら日本の北半分のために力を注いできた。しかしいまや南半分のことも考えるべきである<sup>70</sup>」と主張し、第六回の公会でも「今主ノ教ハ日本ニ来リ東ノミヲ照ス故ナシ、然ラハ実ニ全日本ヲ照ス可シ<sup>71</sup>」と述べ、東京以西への伝教に力を入れるべきかどうか、議論するよう促している。しかし、公会に集まった日本人信徒らは、大勢の信徒を抱える東北地方の教会活動を定着させるよう、これまで以上に人員を割き力を入れるべきか、鹿兒島のような新しい伝教地に伝教者を送り込み、さらなる伝教地を開拓するべきかで意見が二分、侃々諤々の議論が行われた。

これらの議論の中で、イオアン小野は一貫して新しい伝教地を開くべきとの姿勢を取っている。明治六年（一八七三）の段階では「予は保守に適するも、進取に適せざるが故に、敢て新地に赴任するを欲せず」と述べていたイオアンが、このような考えを持つにいたったのは、東海道を鹿兒島での伝教の体験にその要因があるのは間違いないことである。その要因の一つには、司祭への推挙を断ったことで、図らずも向かうことになった東海道地域において、洗礼が施される場に立ち会い、「伝教の成果として信徒が誕生する瞬間を目の当たりにしたことが挙げられよう。司祭が増え、洗礼を施す機会が増えることにより、自分たちの伝教の成果が、信徒となり教会を形作っていくという喜びは大きかったはずである。

第二点として、東海道においても、その後の鹿兒島においても、わずかなつてを頼って様々な土地に入り込み、多様な風土や生活、産業など



に触れたことが挙げられる。学問としての正教という形だけではなく、様々な人々の暮らしの中に定着する正教の必要性に気づき、それはどのように伝えるべきなのかということについて、考えなくてはならない日々であったことが考えられる。このことは、「伝教スルニモ土地異ナレハ其様子モ自ラ異ナリ<sup>72)</sup>」と述べていることからむしろ伝わる。また第六回公会の中で、岡崎を担当していたステファン大越が「教理を精くすと雖とも聖寵に沐浴するに非らされは、徳に生長する能はず<sup>73)</sup>」と発言していることから、学問的に教理に精通することだけでは不十分であるとの認識は、新しい伝教先に派遣されている伝教者に共通のものであった。

三点目として、伝教先におけるプロテスタント諸派との競合がある。ニコライは「正教は、カトリックとプロテスタントと対比されてこそ自らの優れていることを示すことができる<sup>74)</sup>」という信念を持っていたが、同じ土地における競合は、一般の聴衆に対しての有効性だけではなく、イオアンら伝教者にとっても、正教を客観視し、その特質を改めて認識する機会になった。

このように、伝教を行うことは、広く世の中を見聞し、視野を広げることでもあった。それは士族ハリストアニンらの知的欲求を満たすばかりでなく、正教を客観視し、より深く理解するきっかけともなった。このことは、正教が「自分たちの教え」、すなわち「旧仙台藩士族の教え」という仲間意識に支えられた共有の枠を越え、より可能性のある宗教であることを彼らに実感させた。以前は学問的傾向に陥りがちであった士族ハリストアニンらが、故郷から離れた土地であっても、人々の暮らしの中に直接訴えかけ、影響を与えられるということに喜びを感じ、それを自らが進むべき道ととらえ、活動に邁進したことが、正教会に全国伝教への舵を大きくきらせることにつながったと考えられる。

### 註

1 ニコライ著、中村健之介訳『明治の日本ハリストス正教会―ニコライの報告書―』（教文館 一九九三）一四―一六頁。

2 「小野家資料」（仙台市博物館所蔵）

3 同右。

4 『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅶ―仙台藩士資料（家わけ）―』（仙台市博物館 一九九四）には、「日記草稿」とのタイトルで収録され、年未詳となっているが、一〇月一〇日に鹿児島に到着したという記述が、『教会報知』第二二号（明治十一年二月一日）への報告と一致す

ることなどから、明治十一年八月二十五日から同年十二月三日の日記であると判断した。

- 5 『仙台市博物館年報』七（仙台市博物館 一九七九）
- 6 『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅶ―仙台藩士資料（家わけ）―』（仙台市博物館 一九九四）
- 7 拙稿「士族ハリスティアニンの在村時代―その日常と知的営為―」（『歴史人類』第三七号 二〇〇九）
- 8 「明治初期日本人信徒による『正教会』理解―士族ハリスティアニンに注目して―」（『社会文化史学』第五三号 二〇一〇）
- 9 石川喜三郎編『日本正教伝道誌』卷之貳（正教会編輯局 一九〇一）四一頁。
- 10 同右、三九頁。
- 11 同右、四四頁。
- 12 同右、同頁。
- 13 同右、同頁。
- 14 明治四（一八七二）年ニコライが戻ってくると、本格的な教理研究が開始されたが、旧仙台藩士族らの一部は、原語を学んだ後に研究しな  
くは、その奥義は究められないとの思いから、ロシア語習得の必要性を主張したという。その状況を沢辺のみは「竊に謂へらく、仙台より  
相会したる輩は、小野・笹川を始め、何れもこれ儒者の輩なれば、彼等は平素学問を好み、読書講学を以てその業となさんとするの傾きあり。  
斯くては到底布教の大事を執行する事思束なければ、何とかしてこれを廃止せしめざるべからず」（『日本正教伝道誌』卷之壹 一〇九頁）と  
見ていた。
- 15 前掲『日本正教伝道誌』卷之貳、四三頁。
- 16 同右、四四頁。
- 17 同右、四五頁。
- 18 同右、五一頁。
- 19 石川喜三郎編『日本正教伝道誌』卷之壹（正教会編輯局 一九〇一）二三七頁。
- 20 登米県は明治四年（一八七二）に宮城県に編入。

- 21 前掲『日本正教伝道誌』卷之壹、二四一頁。
- 22 前掲『日本正教伝道誌』卷之貳、七二頁。
- 23 同右、同頁。
- 24 「海道日記」三月四日～三日条。
- 25 「海道日記」三月五日条。
- 26 「海道日記」三月五日条。
- 27 「海道日記」三月一七日条。
- 28 「海道日記」三月一八日条。
- 29 「海道日記」四月九日条・一二日条。
- 30 「海道日記」二月二八日条。
- 31 「公会議事録 明治九年」(盛岡ハリストス正教会所蔵)
- 32 前掲『日本正教伝道誌』卷之貳、七六頁。
- 33 『講習余誌』第一号(明治一〇年三月一五日) 仙台市立博物館所蔵。以下の『講習余誌』は全て同所蔵。
- 34 『講習余誌』第一号・第二号(明治一〇年三月二五日)・第三号(明治一〇年四月五日)・第六号(明治一〇年五月五日)・第九号(明治一〇年六月一五日)に五回連載。
- 35 『講習余誌』第一六号(明治一〇年二月五日)・第一七号(明治一〇年二月二五日)に二回連載。
- 36 『講習余誌』第一号・第三号・第四号(明治一〇年四月一五日)の三回に連載。
- 37 『講習余誌』第五号(明治一〇年四月二五日)・第六号・第七号(明治一〇年五月一五日)に三回連載。
- 38 『講習余誌』第四号。
- 39 『講習余誌』第九号(明治一〇年六月一五日)
- 40 「明治十年公会議事録」(盛岡ハリストス正教会所蔵)

- 41 「ニコライ書状」(「小野家資料」仙台市博物館所蔵)
- 42 「小野家系譜」(「小野家資料」仙台市博物館所蔵)
- 43 前掲『日本正教伝道誌』巻之貳、八二頁。
- 44 同右、同頁。
- 45 ニコライ著、中村健之介訳『明治の日本ハリストス正教会―ニコライの報告書―』(教文館 一九九三) 二七頁。
- 46 「日記草稿」八月二三日条。
- 47 「日記草稿」一〇月五日条。
- 48 『教会報知』第二二号(明治二十一年二月一日)同志社大学人文科学研究所蔵。以下で引用する『教会報知』は全て同所蔵。
- 49 『鹿児島県史』第四卷(鹿児島県 一九四三)
- 50 「日記草稿」一〇月一日条。
- 51 「日記草稿」一〇月一六日条。
- 52 『日本正教伝道誌』においては「伊坐敷」と表記されているが、『教会報知』、「日記草稿」の「伊佐敷」と同一の名字を指すと判断した。
- 53 前掲『日本正教伝道誌』巻之壹、二二三―二三三頁。
- 54 「日記草稿」一〇月一六日条。
- 55 「日記草稿」十一月三日条。
- 56 『教会報知』第二二号(明治二十一年二月一日)
- 57 小野莊五郎は、明治元年(一八六八)七月、仙台藩出入司松倉恂より武器と軍資金の提供を受け、星恂太郎の額兵隊、金成善右衛門の回天隊とともに勇義隊を組織、隊長に推されていたという(大村栄「慶応二年の小野莊五郎―在村閑居の日記から―」『仙台郷土研究』二二五、一九八二)。
- 58 前掲『日本正教伝道誌』には「東奥の人士は、偶々官軍に抗したるがため、賊軍の名を被ふり、敗軍の後に城下の盟をなしたるの後と雖も、薩長の諸藩を以て、君側の奸・国家の賊となして、彼等に対するの怨みは、永く忘る能はざりしなり。」との一文がある(巻之壹、六七頁)。

- 59 『教会報知』第二号（明治二十一年二月十五日）
- 60 『教会報知』第三号（明治二十一年二月二十九日）。一月二日付のイオアン小野の書簡による報告が当号に掲載されている。
- 61 『教会報知』第三号（明治二十一年二月二十九日）。一月七日付のイオアン小野の書簡による報告も、当号に掲載されている。
- 62 「日記草稿」一月二十九日条。
- 63 「日記草稿」一月三〇日条。
- 64 『教会報知』第二十七号（明治二十二年三月三〇日）。三月一〇日付のイオアン小野の書簡による報告が当号に掲載されている。
- 65 『教会報知』第二十七号（明治二十二年三月三〇日）
- 66 『教会報知』第二十三号（明治二十一年二月二十九日）
- 67 『教会報知』第二十三号（明治二十一年二月二十九日）
- 68 『大日本正教会議事録（明治二十二年）』（盛岡ハリストス正教会所蔵）五四頁。
- 69 同右、一〇七頁。
- 70 前掲『明治の日本ハリストス正教会―ニコライの報告書―』五六頁。
- 71 前掲『大日本正教会議事録（明治二十二年）』一〇七頁。
- 72 同右、一〇九頁。
- 73 同右、九九頁。
- 74 前掲『明治の日本ハリストス正教会―ニコライの報告書―』一〇二頁。